
三月の白/F

七人伝一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三月の白ノF

【Nコード】

N7879B

【作者名】

七人伝一

【あらすじ】

ハイパーいい加減物語「呪術師さん（旧作）」に登場した端役の後日譚。シリアスではない。しかしコメディとも言いがたい。あえて言うならナンセンス。

三月の白 / the fragment of Mr. Original Magi

僕がその娘と出会ったのは珍奇な天気の日だった。時期は三月、しかも当年は暖冬で、降雪の多い土地柄でもないのに雪が積もっていた。まさに季節外れの積雪だが、その原因は彼女にあった。

彼女は俗に言う雪ん子とか雪童子とか呼ばれる存在であり、訪れる場所は雪が降りやすくなるのである。彼女は外見からして常人の規格から外れていた。身長は30センチほどで、体形は人間というより人間をデフォルメしたビスクドールなどの類に近い。その身の丈にあった小さな蓑を身に着けていた。

僕が発見したとき、彼女は誰かの作った雪だるまに寄りかかって寝入っていた。彼女はどうかやらよく知らない街に迷い込んだらしかつたが、放っておいても元居た場所に帰るだろうと思ってそのとき

は放置しておいた。しかし翌日、ピーピー泣きながら別の街を彷徨している彼女を再発見した。

俺はそんな彼女に声を掛けた。

「迷ったのか？」

「ひいっ！」

さすがに悲鳴を上げるのはひどいと思った。

さて。ここで僕について説明しよう。僕は五行機関ごけうきかんという退魔組織に所属していた。中学校を卒業してからは高校に入らず主に組織の仕事をこなして日々を過ごしていたのだが、さして実力が向上するわけでもなく下っ端の中の下っ端であった。当時それを打破しようと無謀な挑戦をして生命の危機に直面したのは、今でも少々苦い思い出である。

五行機関における退魔とは、俗にオカルトと呼ばれる存在に関する厄介ごとを処理することである。だから、彼女を保護して故郷に戻してやるのも僕の仕事と言えた。

僕は彼女を引き連れて新幹線で一路北へ向かった。移動中彼女を膝の上に乗せていたのだが、人形を抱えた幼稚な男と思われているのか周囲の視線が痛かった。

電車やバスを乗り継いで行くにつれて周囲の光景は寂れてゆく。

これだけの距離をどうやって渡って来たのか疑問に思っ て訊ねると、「飛行機雲に乗ってきた」

と返された。分かるような分からないような微妙な答えだが、退魔の仕事は不可解な現象だらけなのでさして気にしなかった。これも処世の術である。

一日一往復しかないバスを降りると、そこは寂れた温泉だった。従業員はたったの3人で、客は僕と彼女だけ。この宿で一泊した後、僕達は雪山に入った。

しかし僕は数時間後、非常に強く後悔することとなった。

「・・・・・・・・雪山を舐めていた」

3月だというのに吹雪が発生していて、1メートル先も見えなかった。歩くのにも困る僕の前方を、彼女はてくてくと平然とした様子で歩いていた。さすがは雪童子。ここは彼女のホームグラウンドなのだ。

そもそも雪山まで案内したら僕だけ引き返せば良かったのだが、考え無しに惰性で雪山に入ってしまった。こういった阿呆さが僕の下っ端の中の下っ端たる所以なのかもしれない。

意識が朦朧として、気付けば僕はうつ伏せに倒れていた。彼女が耳元で叫ぶのを聞きながら、僕は寒さと疲労で気を失った。

目覚めると僕は、見知らぬ日本家屋の座敷で布団に入って横になっていた。僕が寝ている布団の横には、これもまた見知らぬ和服を着た美貌の女性が正座していた。互いに挨拶をして自己紹介をした。彼女はあの雪童子の母親の雪女らしい。

「娘が無理に連れてきてしまったようで。誠に申し訳ありません」
雪女はそう言って深く頭を下げた。雪女の説明するところによると、雪童子は僕を置いて宿を離れるべきだとは分かっていたが、どうしても一緒にここまで来たかったがために愚行を犯してしまったのだそうだ。

「結果的には無事だったし、一人で行くのが寂しかったという気持ちも分かります。そもそも、エスコートする側である僕の無思慮が問題だったと思いますし」

そう言って僕は雪女と雪童子を許した。というか許す以前に、彼女達にはほとんど非は無かったと思う。それを聞いた雪女は疲れたように首を横に振ると言った。

「いえ、それが・・・・・・・・娘はあなたと結婚したいと申しており

まして」

雪女の背後の襖が開く。見覚えのある面影を宿した美しい女性がそこに居た。

彼女達の一族は、山里に降りて自分の夫を見つけて故郷に連れて帰ることで、雪童子から雪女に成長できるということ。そして、この吹雪では僕が単独で帰還することはまずできないということ。とどめに、彼女達は僕を返すつもりがさらさら無いということ。

そういつたことを、雪童子から雪女に成長したばかりの彼女から、僕は教えられることとなった。

(後書き)

彼らのその後は自由に想像してやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7879b/>

三月の白/F

2010年10月28日00時57分発行